



一般教育演習(フレッシュマンセミナー) グローバル・キャリア・デザイン 3

第13回 FSP 北米全体報告書

2016.03.02~16



目次

FSP とは？	2
メンバー・班紹介	3
日程	5
準備授業	7
企業・組織訪問	8
Judd Wire Inc.	
マサチューセッツ総合病院	
タフツ大学	
在ボストン日本国総領事館	
日系レガシーセンター	
EPSON Portland Inc.	
ポートランド市開発局	
協定校訪問	12
マサチューセッツ大学 アマースト校 (University of Massachusetts : UMass)	
ポートランド州立大学 (Portland State University : PSU)	
自由課題活動	14
アメリカでの生活(体験談・失敗談)	18
事後の研修	19
参加者アンケート	20
編集後記	23

FSP とは？

正式名称は「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」で、通称「FSP（ファースト・ステップ・プログラム）」という。FSPは北海道大学の全学教育科目の1つであり、2単位が取得可能である。

FSP という名前からも分かる通り、このプログラムの目的は、次の海外プログラムにつなげるための第一歩を踏むことにある。そしてその先にはグローバルに活躍できる人材となることを視野に入れている。そのために、海外とはどんなものなのか、留学とは実際どんな感じなのかということを感じたり、今後の進路の決断のための情報収集ができたかのように構成されている。

・応募資格

まず、北大の1・2年生であること、必要最低限の英語能力をもっていること、海外や留学に興味があること、協調性や積極性があることなどがある。参加者の選考には、書類選考と面接が行われる。また、奨学金による参加費用の補助があるが※、それには一定ラインの大学（夏季プログラム参加の1年生の場合は高校）での成績が必要になっている。

・FSP の特徴

FSP では、海外の大学への訪問・学生交流や、国際機関や国際的に展開する企業の見学、さらにはそこで実際に働いている方の講話を聴くことがプログラムに含まれている。また、20人程のグループで活動するので、通常の短期留学とは異なる体験ができるのが特徴だ。FSPは訪問先の地域によっていくつかのコースに分かれており、他のコースにはアジア、ヨーロッパがある。（2016年度は中国プログラムが新設される予定）FSP北米は2015年度の春季から開講されたものである。FSPでは、将来の留学のための準備としての体験や、職業像を考えるための体験、国際協力について考えるための体験など、様々なことが体験できる。しかし、どこが重点的になっているかは、コースによって異なる。例えば、今回のFSP北米では長期留学に向けた話が多い、という特色がある。

※FSP北米の場合、8万円の奨学金支給された。基本の参加費用が約32万円、現地での交通費・食費・雑費が約7～10万円、他キャリアケースやパスポートなどの海外渡航に必要なものをそろえる費用なども含め、最終的に費用は35万円前後となった。

班・メンバー紹介

リーダー…グループ全体のまとめ役や毎晩のミーティングの司会進行を担当。



歯・1 堀 貴遥

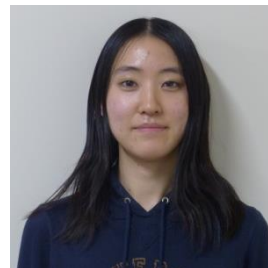


工・2 山元 爽

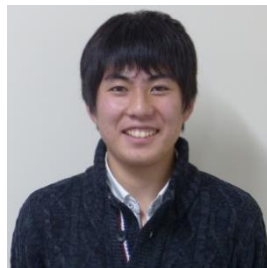
企業訪問班…訪問企業・組織の調査やしおり作成を担当。



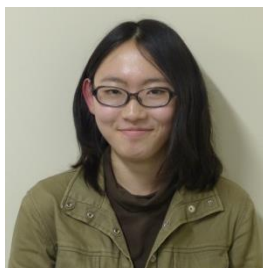
薬・2 藤本 圭志



理・2 阿部 優子



農・2 長部 高之



文・1 土尾 聖里菜



文・1 森 絢楓

記録広報班…Facebookの更新、全体報告書・帰国報告会を担当。



工・1 新帯 亮平



薬・1 甘利 穂乃花



法・1 宇之津 紗矢



文・2 下川 千尋

総務企画班…研修のしおり作成、学生交流の企画運営を担当。



法・1 梅原 佳吾



経・1 小椋 有季乃



医・1 佐藤 陽亮



総理・1 早川 怜恵

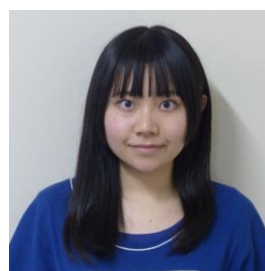
プレゼンテーション班…現地の大学生に日本や北海道について紹介するプレゼンを担当。



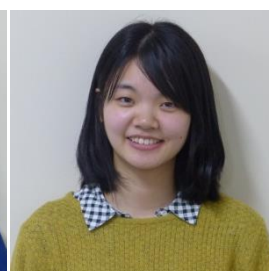
文・1 川上 雄大



法・1 秋山 紗永



文・2 後藤 里彩子



法・1 菅原 瑞葉

なお、メンバーの学部、学年は、FSP 北米海外研修参加時のものです。

研修日程

準備授業 (6限 18:15~19:45)

- 第1回 2015年12月14日
- 第2回 12月21日
- 第3回 2016年1月7日
- 第4回 1月14日
- 第5回 1月21日

アメリカでの海外研修

- 3月2日(水)
 - 成田経由でボストン市へ移動
- 3月3日(木)
 - 午前 UMass に移動
 - 午後 UMass でオリエンテーション
 - Judd Wire Inc. 渡邊寛之社長の講話
 - UMass キャンパスツアー
 - 振り返りミーティング①
 - UMass 学生のプレゼン発表見学
- 3月4日(金)
 - 午前 授業見学
 - UMass 学生とランチ
 - 午後 UMass 周辺のバスツアー
 - 北大生のプレゼン・学生交流
 - UMass 学生とディナー
- 3月5日(土)
 - 午前 ボストン市へ移動
 - 午後 自由課題活動
- 3月6日(日)
 - 自由課題活動
- 3月7日(月)
 - 午前 マサチューセッツ総合病院
 - 内田舞医師の講話
 - 午後 タフツ大学 森田喜代子講師の講話
- 3月8日(火)
 - 午前 振り返りミーティング②

- 在ボストン日本国総領事館
- アミール偉専門調査員の講話
- 午後 ポートランド市へ移動
- 3月9日(水)
 - 午前 日系レガシーセンターを訪問
 - 午後 EPSON Portland Inc.
 - 織田吉夫常務の講話&会食
- 3月10日(木)
 - 午前 オリエンテーション・PSU キャンパスツアー
 - PSU 学生・スタッフと昼食
 - 午後 PSU 留学についてのプレゼン
 - 振り返りミーティング③
- 3月11日(金)
 - 午前 アメリカでの留学についてのプレゼン
 - 授業見学
 - 午後 アメリカでの Job Preparation についてのプレゼン
 - 北大生のプレゼン・学生交流
- 3月12日(土)
 - 自由課題活動
 - (午前 希望者のみ日本語継承校でボランティア)
- 3月13日(日)
 - 午前 振り返りミーティング④
 - 自由課題活動
- 3月14日(月)
 - 午前 ポートランド市開発局
 - 山崎満広国際事業開発オフィサーの講話
 - (希望者のみ市役所訪問)
 - 午後 自由課題活動
- 3月15日(火)、16日(水)
 - ロサンゼルス、成田経由で札幌に到着

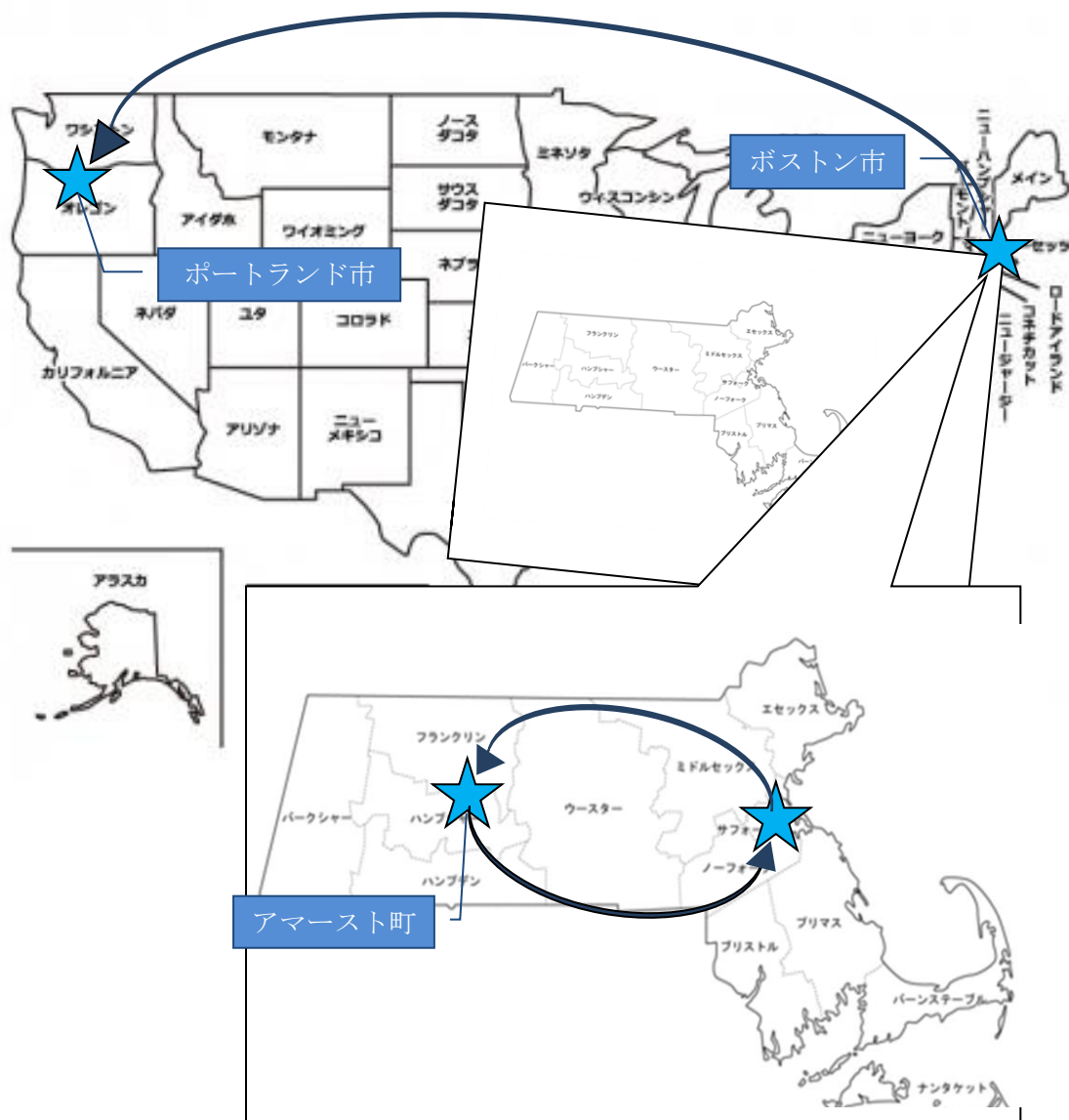
事後の研修 (6限 18:15~19:45)

第1回 2016年4月6日(水)

第2回 2016年4月13日(水)

第3回 2016年4月20日(水)

(帰国報告会)



準備授業(全 5 回)

12月から1月にかけて、海外研修に必要な情報の共有を行う授業が5回行われた。これが準備授業である。メンバーの初顔合わせや班の結成もこの場で行われた。

第2回の準備授業では、FSPの授業名でもあるグローバル・キャリア・デザインに関連し、「グローバルとは何か」「グローバルに活躍するとはどういうことか」について各々の意見を交換した。また、第3回の準備授業は第14回FSPアジアの参加者の皆さんとの合同で、「異文化コミュニケーション」をテーマに授業が行われ、「留学生向けに北大の魅力を伝えるための一日ツアー」をグループごとに考えて発表した。第4回の準備授業では、アメリカでの安全管理・危機管理について学習。早朝や夜は出歩かないことや、荷物を絶対に放っておかないこと、派手な格好をして目立たないこと、パスポートをなくした場合の行動などを学んだ。日本がいかに安全な国か普段から耳にすることではあるが、改めて実感するとともに、緊張感を持った。最後の授業では、アメリカの協定校の学生向けに発表する予定のプレゼンをプレゼン班の皆さんに発表してもらい、他の参加者はフィードバックをした。そのために、効果的なフィードバックの方法についてもみんなで見聞交換した。



この準備授業を通して私たち参加者は、自分の意見を持ち、積極的に発言することや建設的なフィードバックの仕方・作法などを練習した。出発が近づいてきたころにはみんなが意見を言い合える雰囲気がほとんどできていたと思われる。また、訪問する国や地域の治安や医療事情などについてしっかり調べ、頭に入れておくことがどれほど大切なのかを学ぶことができ、とても有意義な時間にする事ができた。

さらに、この準備授業と並行してプレゼンの作成や練習、しおりの作成、学生交流の企画、活動の様子広報などの各班の活動や、個人での目標設定など海外研修に向けた様々な準備が進められた。



企業・組織訪問

Judd Wire Inc. 渡邊寛之社長

今回お話を伺ったのは、Judd Wire Inc.の渡邊寛之社長である。今回は、ご自身の経歴や異文化コミュニケーションについてお話を伺った。

渡邊社長は今まで多くの本を読んでこられ、日本文化について多くの知識を持っていらっしやった。その知識を元として、日本は「気づかいをする」文化であり、アメリカは「気兼ねをしない」文化であるということなど、日本文化とアメリカ文化の違いについてお聞きした。

また、異文化コミュニケーションについて、論理の理解と価値観の理解が不可欠ということをおっしゃっていた。さらに、コミュニケーションの土台になる英語をどう伸ばすか、ということについてアドバイスをいただいた。特に印象的だったのは、英語のネイティブではない私たちが抱きがちな、「言いたいことが伝わらない」「相手の言っていることが分からない」といった困難を乗り越えれば、世界はおのずと変わってくる、というお言葉だった。

アメリカに到着し、日本とは全く違う文化や習慣、言語に戸惑っていた参加者にとって、渡邊社長のこのお話はとても勇気づけられるものとなった。特に、アメリカについてから慣れない英語に苦勞していた参加者も多かったため、英語についてのアドバイスは特に参考になった。

マサチューセッツ総合病院 内田舞医師

内田舞医師は北海道大学医学部出身で、現在、ハーバード大学医学部精神科アシスタント・プロフェッサーと Massachusetts General Hospital (MGH) 小児精神科指導医を務められている。今回はご自身のキャリアと子供の精神疾患についてお話を伺った。

内田医師は北大在学中から医学に対する高い志を持ち、大学1年生の時から長期休みのたびに海外の病院で実習を経験された。大学一年生から、英語能力、医学の専門知識、そして高い意識を持たれていたということに、参加者は皆感銘を受けた。さらに、日本における女性の地位の低さについてもお話を頂いた。日本では女性が働くことへの偏見が根強く、優秀な女性が日本社会で活躍することが難しい場合がある。自分たちが今後受けるかもしれない女性差別の可能性と、その対応策として、女性差別がない場所を探す、自分にとって何が重要かを考える、ということを知ることができた。

さらに、子供の精神疾患についてのお話も伺った。内田医師は小児精神医療について社会に広く認知してもらうような取り組みもされている。また、精神疾患には生物学的な要因が大きく関連し、うつ病の生物学的リスクに薬理・心理療法で介入するということが現在研究されている。今回のお話では、内田医師の意志の強さと行動力、数々の困難に負けない心身の強さに圧倒された。これからのキャリアを考えていくうえで、早期から積極的に

行動してゆくということを学んだ。

タフツ大学 森田喜代子講師

タフツ大学の森田講師から、日本語教育や教育現場についてお話を伺った。森田講師は今まで日本語を教えてこられたということで、日本語の難しさについてお話を伺った。森田講師は日本語を教えることの難しさに直面されながらも、長年アメリカで日本語を教えてこられた。

さらに、教師がどのようなクラスを作ってゆけばよいか、ということについてもお話をいただいた。



日本では、教師が上、学生が下の立場に立ち、教師が一方的に学生の頭に知識を入れるという体制がまだ根強い。森田講師はこの体制を疑問視し、教師と学生が同じ目線で、お互い学びあうということを大切になさっている。さらに、学生がクラスでどんな発言をしても笑われない"safe classroom"作りを大切にしているという。日本の学校では、授業で間違った発言をしてしまうことを嫌がる学生が多いが、このようなクラスがあれば、学生がみな伸び伸びと自由に学ぶことができると考えた。また少し意外だったのは、世界で活躍するためには英語だけでなく日本語も勉強しなくてはいけないとおっしゃっていたことだった。FSP 北米参加者は、英語の能力を伸ばすということにばかり気を取られがちだったが、今改めて美しい日本語に触れてみようと考えた。

在ボストン日本国総領事館 アミール偉専門調査員

在ボストン日本国総領事館は、外務省の在外公館の1つで、マサチューセッツ州を含むアメリカ北東部のニューイングランド6州を管轄する。在留邦人からの各種届出の手続きや外国人へのビザの発給といった領事業務だけでなく、日本を知ってもらうための広報文化活動や、日本企業のニューイングランドへの誘致、並びにアメリカ企業の日本への誘致に関する活動等、幅広い業務が行われている。

今回私たちは、ボストン総領事館において科学技術担当の専門調査員として勤務するアミール偉(いさむ)さんにお話を伺うことが出来た。アミールさんは、化学分野で修士(現在は博士)課程まで進学された一方、大学、大学院在学中に教職科目を取り、教育のお仕事をされていた時期もある。その経験から、「この学部に入ったからこの職業に就く」などと、自分自身で可能性や選択肢を狭めないこと、「一見関係ないように見えるものでも、将来につながる可能性もあるので、一つ一つを大切に、情熱をもって取り組むように」と、アドバイスをいただいた。また、進路の選択について悩みを相談する参加者に対しても真剣に考えてくださり、「迷うのは当然なのだから『自分がどうしたいのか、どう思うのか』をはっきりさせることが大切」と教わった。

日系レガシーセンター Michiko Kornhauser さん

日系レガシーセンターはポートランド市ダウンタウン北部にある、元は日本街だった地域に位置する施設である。ここでは、ポートランドに住んでいた日系人の暮らしや、収容所での生活についての展示が行われている。

太平洋戦争時に、当時の大統領フランクリン・D・ルーズベルトは、西海岸に住む日系アメリカ人が日本の味方をするのを危惧して、日系人の強制収容を行った。日系人が入れられたのは畜舎で、1家族に与えられたスペースはほんのわずか。寝るところや座るところもほとんど与えられない劣悪な環境であった。しかし、彼らは自分たちで自分たちの環境を良くしていこうと、家具を作るなどして少しずつ住みやすい環境を作っていた。何も無いようなところから復興しようとする思いは、先に起きた東日本大震災に通ずるものがあるのではないかと思った。

また、日系1世は日本人だが、アメリカに来てから生まれた子供、つまり日系2世はアメリカ人である。つまり親と子は、戦争中、敵同士だったのである。日系2世の中にはアメリカ兵として志願する者もいたようだ。私たちよりも愛国心が強く、お国のためにと教育されていたろう当時の人々の心中には、計り知れない大きな苦悩と葛藤があっただろう。今回の訪問で、日本であまり知られていない、日本人および日系人の素晴らしい歴史を海外で知ることができた。

EPSON Portland Inc. 織田吉夫常務

EPSON Portland Inc.の織田さんに工場を案内していただき、その後お話を伺った。

工場の従業員は少なく、ロボットでの生産が大部分を占めていたが、工場内には安全のための注意書きが至るところに貼られており、安全面への対策が十二分になされていることが見て取れた。講演ではEPSON Portland Inc.について、ご自身の海外へ進出前と後についてお話しして下さった。織田さんご自身は英語の勉強は元々取り組んでいらした。しかし、日本が海外に進出するようになり、海外要員育成に力が入った後も、なかなか海外で仕事をする機会には恵まれなかった。機会が回ってくるまでの間、織田さんは技術翻訳の勉強や長野オリンピックに向けた通訳ボランティア育成講座等を利用して、モチベーションを保ち続けていらした。このようにチャンスが来るまで努力し続け、現れたチャンスを逃さなかったからこそ、今の地位があるのだと思った。たゆまぬ努力を続ける織田さんの姿勢は、今後自分たちが身に着けていく必要のある力・考え方だと思った。

また、長年海外で働くために必要なのは、英語力だけではなく、文化やコミュニケーションの違いを受容することや、自分の武器となる深い専門知識と、専門外の広い仕事経験であるとおっしゃっていた。海外で仕事をするつもりがなくても、これからますますグローバル化が進んでいく日本ではこれらの力が必要になるかもしれない。大学にいるうちにもっと勉強をして、異文化に触れておく必要があると強く感じた。

ポートランド市開発局 山崎満広国際事業開発オフィサー

ポートランドでの活動最終日の午前中にポートランド市開発局を訪問し、山崎満広さんの講話をうかがった。山崎さんは主に地場企業の輸出支援や海外直接投資の誘致などのプロジェクトを進める仕事を担当しているが、今回の講話の内容はPDCの主な仕事であるポートランド市の開発や再生の話が主なテーマだった。

1970年代、ポートランドは排気ガスで空気が濁るほど環境の悪い街で、その住みにくさが問題となっていた。しかし、現在は「全米住みたい街 No.1」に輝くほど環境の良い街になり、次々と人口が流入している。

これを可能にした街づくりの方法というのは、よく耳にする、日本のやり方とは大きく異なっていた。将来の土地再生により、その価値が上がると仮定して、市が固定資産税を前借りして財源とする制度や、年度を跨いでの予算案を作成するなど、さまざまな方法を用いてポートランドの街づくりは行われていったという。

他にも、一般市民を中心に専門家も交えながらのワークショップを開き、そこで開発計画の枠組みを決めていく方法についての話となった。手間をかけながら、皆が納得できるように開発を進めてゆく姿勢にも感銘を受けた。また、この方法を用いるのに必要な方法として、”Facilitation”があるとおっしゃっていた。Facilitationとは「大量のアイデアを1つの方針へとまとめあげる力」というようなものだという。これはどれだけ学校で勉強しても、実践がなければ身に付かないものだとおっしゃっていた。

今後、何かのリーダーとして多数決では決めきれない難しい問題を解決するにあたって、使ってみたい方法だと思った。また、Facilitationの実践的な練習ができる場面に積極的に参加したいとも思った。



マサチューセッツ大学アマースト校

マサチューセッツ大学アマースト校（以下、UMass）に訪問した。北海道大学の前身である札幌農学校の初代教頭ウィリアム・クラークは、UMassの第3代学長である。

今回の訪問ではUMassの学生によるキャンパスツアー、授業訪問やUMassの学生たちとの交流を行った。

キャンパスツアーでは、教室や食堂、図書館などを見学した。キャンパスはとても広く建物も多かった。また、食堂は全米の大学食堂のランキングでも高いランクに入るほどで、ビュッフェ形式の明るい食堂だった。

授業訪問では、日本語や化学などのクラスに分かれて見学を行った。UMassでは教師と学生の距離がかなり近く、学生が気軽に発言や質問をできるようになっていた。このような授業では、学生が一方向的に教えられるのではなく、自分から主体的に学ぶことができると感じた。

学生交流では、Thatcherと呼ばれる寮に住む学生たちとの交流を行った。Thatcherは言語を学んでいる学生たちのための寮であり、日本語を学ぶ学生や日本人留学生在が暮らしている。北大プレゼン班は彼らに向けて、日本の大学生の日常生活を紹介するプレゼンテーションを行った。また、総務企画班が中心となり、日本文化について知ってもらうために「ことわざかるた」を実施した。Thatcherの学生たちにとって、ことわざやかるたは珍しく大変興味深そうにしていた。

学生交流の後はThatcherの学生たちと夕食に出かけ、交流を深めた。参加者たちはアメリカの学生たちと深く交流したことで、大きな刺激をもらうことができた。



ポートランド州立大学

ポートランド州立大学 (Portland State University: 通称 PSU) は、ポートランド市内に位置しており、1946年創立のオレゴン州で最も規模の大きい総合大学である。

PSU 訪問では、職員の方々に様々なプレゼンをしていただいた。アメリカに留学すること、PSU に留学すること、アメリカで就職することについてだ。アメリカに留学すること



については海外研修中にもたくさんの情報を得ることが出来たが、特に驚いたのはアメリカの大学生は自分の専攻を平均 4 回は変更するということだった。また、アメリカで就職することについてはとても新鮮だった。アメリカの大学では1年生の時から履歴書の書き方を学ぶのがあたりまえであることや、履歴書には判断材料に使わないという理由で性別や生年月日、顔写真を載せたりしないことなど、日本との違いに驚くとともにアメリカの考え方を学ぶことができた。他にも、留学前にやっておきたいこととして、自分の専攻に関する英語を学習しておくことや日本文化について学んでおくことをアドバイスしていただいた。

PSU でもプレゼンとことわざかるたを行った。詳細は UMass のページを参照していただきたい。プレゼンとかるたのどちらも、前回の反省を活かし改善を加えたことでスムーズに進行することができた。学生の皆さんはたった数年日本語を勉強しただけなのに、とても日本語が上手で、私たちにも日本語でたくさん話しかけてくださった。また、ことわざかるたのことわざの意味を英語で説明する際にはとても熱心に聞いてくださった。



ボストン・自由課題活動 土曜日

私の組んだ 6 人グループはフリーダムトレイルというものを歩いた。フリーダムトレイルとは、ボストン市内にある歴史的建造物を巡る全長約 4km の観光コースである。地面に引かれている赤い線を辿っていけばちゃんと巡れるので、地図が読めなかったり、土地勘がなかったりしても安心して巡ることができる。

スタート地のボストンコモンという公園はとても広く、たくさんの人が散歩をしていて、物騒なアメリカのイメージとは大きくかけ離れた雰囲気だった。日本では見たことがない鳥や、大きなリスがたくさんいた。マサチューセッツ州議事堂→パークストリート教会→グラナリー墓地→キングスチャペルと墓地→ベンジャミン・フランクリンの像とボストンラテンスクール→オールドコーナー書店→オールドサウス集会場→旧州議事堂→ボストン虐殺地跡を訪れた。

お昼前に出発したので、途中のファニユエル・ホールの向かいにあるクインシーマーケットで昼食を取った。2 時近くだったのでメンバー全員お腹ぺこぺこ。けれど、マーケット内は超混雑！！ るるぶや今回利用した日本航空の機内放映でも宣伝があった、ボストン・メイン・フィッシュカンパニーという店で昼食をとった。ここで有名なのは、ロブスターが沢山乗っているロブスターサンド(\$15)と、大きなパンの中をくり抜いて器にしてくれるクラムチャウダー(\$9)である。ロブスターをこんなに安価に食べられるところはなかなかないし、クラムチャウダーはチーズが効いていてとても美味しかった。主に食べ物売られている建物の周りには、雑貨を扱った店がズラリ。そこでも少し買い物をして、再びフリーダムトレイルを歩いた。

ポールリビアの家→オールドノース教会...途中でチョコレートショップに入ったり、お土産店でポストカードを買ったり気の向くままに寄り道しながら Copp Hill 墓地→USS コンステーション号...

終盤、あまり綺麗に舗装されていない道や寒さに加え、橋や丘のアップダウンでメンバーは疲労困憊...それでも最終目的地、バンカーヒル記念塔に到着!! 残念ながら時間の関係上、この塔に登ることはできなかったが、約 5 時間でまわりきった。

帰りは地下鉄で帰ったが、1 番物騒と噂されるレッドラインに乗って、グリーンラインに乗り換えなければならなかった。(実際に物騒なのは、サウス・ステーションという駅より南のエリアである。私たちはそのエリアには行かずにすんだ。) さらに乗り換えはコンコースを歩いて隣駅まで行かねばならず、チンプンカンプン...そんなところに帰宅途中の優しいおじさんがグリーンラインまで案内してくれた。この方は小さい頃に台湾に行く途中で成田を経由したことがあるようで、「コンニチハ」と言ってくれた。案外アメリカの人って優しいなと思ったのと、自分の母国語の挨拶をされると妙に安心した。

こうして自由課題活動 1 日目を終えたわけだが、1 日を共にすると知らなかったメンバーの一面を知ったり、かなり土地勘がついたりした。残念だったのは、ボストンの歴史を勉強していれば、より一層楽しめたのだろうなということである。

ボストン・自由課題活動 日曜日



この日は、前日に引き続きボストン各地の名所や観光地を巡った。人によって訪れた場所は異なるのだが、おおよそメジャーなところを回っていたようであった。例えばボストン中心部から少し北に向かったところにあるハーバード大学や、マサチューセッツ工科大学などの教育機関、かつて実際に活躍した軍艦の展示、世界的にも有名なボストン美術館などがそれにあたる。また、食事は研修一日目に空港で出迎えてくれたガイドの方からの情報で、現地で有名であった”legal sea food”に行った者もいた。

日本との違いを感じられたところもあった。その筆頭が地下鉄・トラムだろう。トラムの地下鉄の駅には時刻表が無く、いつ来るかわからない目当ての電車を探すのに一苦労した。ここで、legal sea food でロブスターを食べたときの経験を、せっかくだから述べておこうと思う。ロブスターがアメリカで食べられ始めたときはもっと粗末な食べ物だったらしく、刑務所の食事になっていたという話だったが、現代においては高級食材であり、一番小さなサイズを選んだが 35 ドルというなかなか高額なものであった。真っ赤に染まったロブスターがテーブルに上がったときは、その迫力に驚いた。感覚としてはイセエビに似た形であり、頭を外して、しっぽの身を引っ張りだすというスタイルは、おそらく同じであろうが、その味はエビでもカニでもなかった。ちょうどその中間のようなものであった。エビのぷりぷり感と、カニの繊維質が組み合わせさったようなものだった。おいしかったが、カニの方が好みである。

様々なハプニングや驚きがあったものの、ボストンという街は札幌とはくらべものにならないほど都会で、ビルが建ちならび、お洒落な通りがいくつもあって、美しい公園もあって、憧れの街という印象が残った。トラムの運転の粗さはのぞいてだけど。



日本語継承学校

希望者 7 名でポートランドの隣、ビーバートンにある日本語継承校で日本語を教えるボランティアを行った。日本語継承校とは、親から受継ぐ言葉（継承語）としての日本語と、日本の文化を学ぶための学校である。幼稚園児から中学生までが複式学級で勉強している。子供たちは、現地の小学校や中学校に通いながら、週末にはこの日本語継承校で楽しく日本語を学んでいる。

私がお邪魔した小学 2、3 年生のクラスでは平仮名やカタカナを学習していた。プリントに書かれている字を鉛筆でなぞったり自分で書いてみたりと、昔、自分もやったような勉強もあった。他にも平仮名とカタカナの神経衰弱をやっていて、みんな楽しそうに勉強していた。また、子供たちが自分たちでじゃんけんを考えるというアクティビティを行っており、私たちにはない、柔軟な発想に驚くばかりだった。

授業の最後は、日本語継承校に通学している子供たち達全員が一つの教室に集まり、15 分間のアクティビティを行った。そこで、私たちは子供たちに向けて札幌についてのプレゼンテーションを行った。ポートランドから札幌まではどれくらい離れているのか、札幌のスープカレーやジンギスカン、ラーメンなどの食べ物、更に札幌で開催されているよさこいソーラン祭りや雪祭りを紹介した。ドラゴンボールや進撃の巨人の雪像を見せると、思った以上にいい反応が返ってきてうれしかった。私たちが日本で見ているアニメがこんなにもアメリカに浸透しているのかと驚いた。



ポートランド・自由課題活動

ポートランドの自由課題活動では、土曜と日曜の2日間で参加者が自由にポートランドの街を見学した。ポートランドは公共交通機関が非常に発達しており、路面電車で街中を移動できるため、とても便利である。また公園やおしゃれな店が多く、人々が豊かな生活を送っているということが伺えた。



参加者が主に訪れたところを紹介すると、第一に「ファーマーズ・マーケット」が挙げられる。これはポートランド州立大学で毎週土曜日に開かれる、農産物や加工品が売られる市場である。野菜、果物、パン、コーヒー、お菓子やジャムや、中には韓国のキムチや、椎茸や舞茸など日本のキノコを売る店もあった。ここでは新鮮な食品が購入できるため、朝から地元の人が多く訪れていた。日本では珍しい野菜を見て

回ったり、ジャムを試食したりととても楽しむことができた。また、日本人が出している店もあり、そこではおいしいケーキを味わうことができた。

もう一つの有名なマーケットとして、「サタデー・マーケット」が挙げられる。毎週土日に開かれ、ポートランド在住のアーティストが制作した絵や工芸品が多く並んでいた。

他にも、トラムというロープウェイや、オレゴン科学技術博物館、ポートランド美術館などを訪れた。市内を流れるウィラメット川沿いにある公園ではちょうど桜が咲いており、美しい川面と桜を同時に楽しむことができた。

また、ポートランドは「コロンビア」や「ザ ノースフェイス」などのアウトドア用品の店も多く、郊外には大きなショッピングセンターもあった。更に、日本でも人気の「ドクターマーチン」もあり、これらの店で大いにショッピングを楽しむ参加者もいた。



アメリカでの体験談・失敗談

・時差とサマータイム

FSP 北米最初の目的地であるボストンは、日本と 14 時間の時差があった。(サマータイム時は 13 時間) 参加者は時差ボケで眠気に襲われたり、食欲がなくなったりとずいぶん苦労する。やっと時差ボケが直った一週間後にはポートランドに移動。ボストンとポートランドは 3 時間の時差があるので、参加者たちは再び時差ボケに悩まされることとなった。また、ポートランドでは 3 月 14 日からサマータイムが始まった。午後 6 時なってもまだ外が明るい、という不思議な感覚を味わうことができた。しかし、ホテルや街中の時計の多くはサマータイム開始前の時間のままで、時間が分からず混乱することもあった。

・食事

アメリカといえば「食事の量が多い」というイメージがあるかもしれない。実際スーパーでは巨大なパックに詰められたフルーツや肉やパンなどが並んでいた。レストランの料理も日本より量が多く、食べきるのに必死ということも…。また、ボストンは港町で、新鮮でおいしいシーフードで有名である。クラムチャウダーやロブスターなどを楽しむ参加者も多かった。ポートランドでは「フードカート」という屋台が有名で、街中には車を改造した店舗が多く並んでいた。ここでは中華料理やタイ料理、カレーなど世界中のおいしい料理を、比較的安価で味わうことができるため、地元の人にも大変人気だった。

・チップ

欧米の習慣の一つに「チップ」がある。ホテルの部屋を掃除してもらったとき、また荷物を運んでもらったときには 1 ドル程度、レストランでは代金の 15~20%程度をチップとして払う。チップは単に「感謝のしるし」だけではなく、働く人の大切な収入源であるため、ちゃんと渡すことが大切である。しかし、日本にはないチップに参加者はなかなか慣れず、チップを置き忘れたり、反対に多くチップを払いすぎてしまったりすることがあった。また、チップを払うタイミングが分からず「いつ払えばいいのかな…」と相談しあうことも。

・アメリカの中の日本

アメリカでも日本文化はある程度浸透していて、街では寿司屋やラーメン屋などの日本食レストランが多い。スーパーの総菜売り場でも、寿司や豆腐の照り焼きが売られており、「おーいお茶」や「カルピス」(アメリカではカルピコという商品名)など日本の飲料を見かけることもあった。また、街を歩いていると、「すみません」や「ありがとう」と現地の方に呼びかけられることも。アメリカでは、街で聞こえてくるのは英語ばかりなので、日本語で話しかけられると少しうれしく感じた。

事後の研修

事後の研修は、第一回が4月6日、第二回が4月13日、第三回が4月20日に行われた。
(第三回は帰国報告会) 第一回の事後の研修では、まず今後のスケジュールの確認と、国際本部が主催している短期留学プログラムの紹介、ならびに自由討論が行われた。

この回の自由討論のテーマは“英語・英語力・英語を使うこと”と“海外から見た日本”というものであった。前者のテーマでの討論で目立った意見は「文法とかがちぐはぐでも通じる」「挨拶から自己紹介程度の会話はできるけど、深い(専門性の高い)対話ができない」「英語は手段であり、あったら視野が広がる」といったものであった。出発前に不安視する声が多かった「英語が通じるかどうか」という考えは大体問題にはならなかったようである。しかし、プライベートな話しかできず、現地では知り得ないこと、英語でしかできないこと、というテーマまで会話を持っていくことができず、「もっと英語力があつたならば!」と少し悔しい思いをした人も少なくなかった。後者のテーマで面白かった意見は「(日本人は)英語力がないイメージ」といったものであった。アメリカ国内線飛行機の安全のしおりの一部重要なところが日本語表記になっていたそうである。話者人口比を考えるなら、中国語やスペイン語でもおかしくないのに、わざわざ日本語になっていたようだ。とはいえ、多くの日本人が受ける大学入試ではちょっとした論文レベルの英文を短い時間で読んで理解することが求められる。つまり日本人は決して英語力がないわけではない。どうしてこのようなことになっているか、と疑問に思った。

第二回の事後の研修では、記録広報班の報告会プレゼンのリハーサルと自由討論が行われた。報告会用のプレゼンを発表し、FSP 北米メンバーからフィードバックを得るのが目的であった。もちろん質疑応答も含める本番仕様となっていて、「いい質問ですね!」といたくなるような痛いところを突く質問に四苦八苦した。この回の自由討論のテーマは“セカンドステップについて”というものであった。少し席の近い人同士で情報共有し、そのあと一人一つホワイトボードに書いて発表した。その時の写真が下のものである。



FSP 北米参加者に対するアンケート

海外研修後に参加者に対して行ったアンケートの結果を紹介する。文章は抜粋し、修正を加えた箇所がある。

Q1. 参加目的は何ですか？

・今後のキャリアを考えるため…7人

「学生同士で将来について漠然としたイメージは持っていても、実際に働くということを社会人の方からお聞きできるという機会はほとんどありませんでした。自分の将来について明確なイメージをつけたいと思いました。」

・長期留学の前段階として…5人

「今後の長期留学などを見据え、海外に一人でも行けるようになればと思い参加した。」

・FSP ならではの経験がしたかったため…5人

「大学・企業訪問という、自分一人では難しい(アポイントメントを取るなどの面)ことが出来るのが魅力に思えた。」

他にも、「海外経験を積むため」、「大学生活の刺激」、「アメリカに興味がある」「視野を広げるため」等の回答があった。また、複数の目的を挙げる人が多かった。

Q2. FSP で変わったこと、成長したと思うところは何ですか？

・これからすべきことが考えられるようになった…4人

「一人ひとり異なった人生観や考え方を持っており、それぞれの生き方から自分がやりたいことに向けて今何をすべきか考えられるようになった。」

・異文化理解が深まった…3人

「自分と違う人相手に偏見を持たずに接することが出来るようになった。」

・コミュニケーションの能力を得られた…3人

「日本語でのコミュニケーション能力が向上したように思える。」

「英語で話さないと伝わらないという状況のなか過ごした場面もあり、海外の人へ話すことへの不安がなくなった。」

他にも「海外のハードルが下がった」「視野が広がった」「勉強へのモチベーションが上がった」「失敗を恐れなくなった」「留学のイメージがつかめた」などの回答があった。回答は多岐にわたり、各々で成長した点は異なるということがうかがえた。

Q3. 「FSP で必要だった〇〇力とは？ 理由もお願いします」

・適応力…4人

「短い期間に充実したプログラムにするためにはそれぞれの状況下で柔軟に対応する力が必要。」

「集団行動をするので思い通りにならないこともある。その中で、各々の場面に適応して行く力が必要だと感じたから。」

・体力…3人

「スケジュールがかなり詰まっていて、2週間休息の暇なく動き続けなければならなかった。一つ一つの企業訪問、大学訪問、自由課題活動、そして移動時間や食事、ホテルの時間でさえ有意義なものにするためには尋常じゃない体力が必要だと思った。」

他にも「積極力」や「コミュ力」(交渉力)、「判断力」、「忍耐力」、「吸収力」、「集中力」など、多くの「〇〇力」が挙げられた。FSP の研修を通して、各々が自分に足りない力を自覚していったのではないかと。

Q4. FSP の中で、うまくいかなかったこと、やっておけばよかったと思うことは何ですか？

・事前の英語学習…10人

「ネイティブの英語は本当に聞き取れなかった。ラジオやテレビなどでネイティブの普段の話す速さに慣れておけばよかったと思いました。」

「しゃべって会話を楽しむことはできても、深い話になってしまった瞬間語彙力がなく、会話についていけなくなってしまっていました。」

・訪問先や自由課題活動の下調べ…8人

「訪問先の地域のリサーチをもっと詳しくやっておけばよかった。時間効率や訪問地域に行くメリットが薄れてしまうから。」

多くの回答が「事前の英語学習」と「訪問先や自由課題活動の下調べ」に集中した。もっと「積極的な行動や発言」をする、「日記をつける」、「日本の文化についてあらかじめ調べる」という回答もあった。

Q5. これから参加する人に向けて一言

・「心配して応募をためらっている人ほど行く価値があると思います。英語は「Sorry」と「Thank you」が言えれば何とかかなと思いますし、治安も本当に治安が悪いところは先生方が教えてくれます。私の場合、FSPでの心配事は集団行動が苦手なことだったのですが、2週間だけなら案外何とかかなります。今やってみないと多分いつまでたっても海外に行けないまんまだと思います。」

・「準備授業、現地での2週間、事後の研修、たくさんの課題、各班活動とやるべきことは山ほどありとても忙しいですが、全てのことから学ぶことがあり、自分のためになるものでした。私のように大学生活や将来どうしたらいいか分からなくて、色んな選択肢や人を見て聞いて迷いたい方にFSPは本当におすすめです。」

・「その目標を達成するため、FSPを利用してやるくらいの気持ちでいった方がいいかもしれません。FSPは個人に機会を与えてくれるだけで、何を得られるかは個人次第です。」

・「初めての環境でも、仲間や先生と一緒にだと思い切って入っていくことが出来ました。行く国や地域についての知識・経験、キャリア形成に役立つポイントなど、得られるものはとても多いです。」

・「FSP参加に大切なことはやはり『目標』である。個人的な目標とグループの目標両方をしっかりと理解しそれを達成するために仲間と共に行動していくことが必要だと感じた。」

・「私はなんとなくで参加を決めた人間です。しかし帰ってきた今は胸を張って「あの時なんとなくでも申し込んで良かった」「行ってよかった」と思います。それはFSPのプログラムが最高に良いものだからだと思います。」

現在北大の1年生、2年生の方はこのコメントを読んでぜひFSP参加を検討して頂きたい。アンケートに協力して下さった参加者の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

編集後記

私たちが作った報告書に目を通していただきありがとうございました。大変だった広報班の仕事もこれで終わりです。大変でしたが、帰国後も留学やセカンドステップに対しての思いが色あせずにいられたので、よかったなって思います。何より、私たちの班は第13回FSP 北米のどの班よりも仲が良かったと思います。そのおかげで楽しかったし、お互いがフォローしあえて、時には真剣に議論ができたのは3人のおかげだと思います。この場を借りて感謝の気持ちを伝えさせていただきます。ありがとうございます。報告会のプレゼンでは私たちが感じたことに重点を置いた分、こちらの報告書では事実をできるだけ載せました。参加を考えている方々が、この冊子によって少しでもFSPに対する誤解や参加にあたっての不安を減らすことが出来れば幸いです。(甘利 穂乃花)

記録広報班は海外にいる間、Facebookで活動内容を広報するにあたって毎日、何をやることのできたのか振り返ることになります。私が記録広報班を選んだのは、その活動によって学んだことを自分の一部にできると考えたからです。広報班の活動は想像以上に忙しく大変な仕事でした。しかし、得たものも当初の予想以上でした。上で述べたことはもちろんのこと、「あの方はこう仰っていたけど、それはこういう意図なんじゃないか」など、私たちは何を学んだのか、何を伝えることができるかについて真剣に意見を交換・共有しながら全体報告書の作成や報告会の準備にあたったことは、学んだことへの理解をさらに深めるうえで非常に有意義な経験であり、学習の成果をより良いものにできました。たくさん話し合いを経てできた報告書です。参加者がぜひ伝えたいと思った内容がたくさん詰まっています。これから参加を考えているみなさんに参考にしていただければ嬉しく思います。ご精読ありがとうございました。(宇之津 紗矢)

報告書を作るにあたって、パンフレットやプレゼンテーションだけでは得られない情報を盛り込み、FSPの魅力をあますことなく伝える、ということに尽力しました。そのために、記録広報班で何度も話し合いを重ねました。その過程は決して楽なものではありませんでしたが、議論を重ねることによって学んだことへの理解を深めることができました。このように記録広報班の活動を通じて、自分自身も成長することができたのは大変うれしいことです。海外経験のない人にとって、海外に出ることはとても難しく特別なことに思えるかもしれません。しかし、一旦海外に飛び出すと、考えられないほど世界が広がります。そのような体験を他の人にもしてほしいと思い、この報告書を作成しました。この報告書をきっかけとして、一人でも多くの方がFSP参加を考えていただければ何よりです。(下川 千尋)

全体報告書を書くにあたって前提となることは、FSP で起きたことを、執筆者である記録広報班全員が共通して知っていなければならない、ということでした。そこで、研修後に班全員で何回か集まり、自分が思ったことを共有したり、アンケートを取った結果から FSP のメンバーが一体何を思ったのかを分析したりしました。その中で、自分が思っていた学んだこと、感じたこととは、他の人とは異なるということに改めて気づくことができました。さらに、それを話し合うことで、洗練された知識や経験として吸収することができました。また、帰国してからの一か月は、この全体報告書の作成や報告会プレゼンの準備をしてきました。どちらも情報量が非常に多く、まとめあげるのに難航しました。ゆえにスケジュールも厳しいものになりましたが、これらのことがあったからこそ、この FSP を最後まで充実して進めることができたのだと思います。自分がどれだけのことをできたのかはわかりませんが、記録広報班という形で FSP に関われたのはよかったです。最後に、この報告書をここまで読んでいただけたことに感謝したいと思います。(新帯 亮平)

謝辞

本報告書を作成するにあたり、FSP の海外研修中に訪問させていただいた、企業や組織の皆様、そして協定校の皆様に厚く御礼申し上げます。

また、FSP の事前授業から海外研修、事後の研修、班活動等全てにわたり、熱心かつ丁寧なご指導を頂いた職員の石倉香理さんをはじめ、異文化コミュニケーションの授業を担当して下さった高橋彩先生、海外研修中に一部引率して下さった竹内亮太さん、ハース千佳子さんなど、国際本部の方々に感謝いたします。

そして、いつも励まし、助けてくれた FSP 北米参加者の仲間たちに感謝いたします。

たった 4 人の記録広報班がここまで活動できたのは、第 13 回 FSP 北米に関わって下さった全ての皆様のお陰です。本当にありがとうございました。

第 13 回 FSP 北米 全体報告書

平成 28 年 4 月 20 日

編 集 記録広報班（甘利、宇之津、下川、新帯）

問合せ先 北海道大学国際本部国際教務課

電話（011）706-8040/8032

Email: ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Facebook <https://www.facebook.com/1ststepprogram>